

「池子の森を守る運動」を通して1980年代 日本社会における「新しい社会運動」を再考する 2

Reconsideration of “New Social Movements” in the 1980s Japanese society Through “Ikego Forest Conservation Movement” II

井上 治子
Haruko INOUE

本稿は、神奈川県逗子市池子米軍住宅建設反対運動（＝池子の森を守る運動）について、1986年から1991年にかけて実施された調査研究結果に基づき1992年に執筆された未刊報告書に、加筆・修正を加えたものの第二部分である。問題の経緯と運動の発生・発展・分裂・衰退について概観した第一部分は昨年度2013年3月刊の名古屋文理大学紀要に収録されており、本稿はその続稿となる。

本稿では、運動成員の属性や運動組織の特徴について、質問紙調査結果・聞き取り調査結果・運動が配布したビラ・文献に沿って明らかにすることが目指される。検討される項目は、①運動成員の基本属性、②リーダーとリーダーシップ、③組織、④運動の目的、⑤政治的態度と既存政党との関係、⑥運動戦略上の特徴、⑦参加動機、の7点である。

これらの検討から、当運動が上記7点のいずれから見ても従来型の社会運動と異なる特徴を備えていることが確認される。

This report is the second part of which modified an unpublished report written in 1992 based on a research carried out from 1986 to 1991 on “Ikego Forest Conservation Movement” in Zushi city, Kanagawa prefecture, that is, Ikego US military housing units protest movement. I already showed historical process of the conflict and the Movements as first part of the report in JOURNAL OF NAGOYA BUNRI UNIVERSITY Vol.13.

We will see what was ‘new’ in “Ikego Forest Conservation Movement” through its: (1). Profile of participants, (2) Readers and Readership, (3) Organizations, (4) Purpose, (5) Political attitude and relationship with political parties, (6) Tactics, (7) Motive of participation.

キーワード：米軍基地問題、池子の森を守る運動、1980年代日本社会、「新しい社会運動」

US military controversy, Ikego Forest Conservation Movement,
1980’s Japan, “New Social Movements”

1 運動成員の基本属性

昨年度の抽稿に述べた通り、今日では神奈川県逗子市池子米軍住宅建設反対運動、すなわち「池子の森を守る運動」は、社会運動論研究の分野において1980年代日本社会における「新しい社会運動」の典型例と看做されている。このことの当否については「新しい社会運動」の定義にもよるので稿を改めて論じるが、一般社会においても当運動はマスメディアに取り上げられ、当時の日本社会において広く注目を集めた。その理由は、“高級住宅地に住む主婦らの社会運動”という新奇なイメージに負うところが大きかったと思われる。

本稿の目的は、問題の経緯と運動の発生・発展・分裂・衰退について概観した前稿に続き、筆者が1991年に実施した質問紙調査結果を中心として、筆者が1986年から1991年にかけて実施した聞き取り調査結果・同時期に運動が配布したビラ・当運動に関する文献を参照しつつ、運動成員の実際の姿を明らかにしていく点にある。使用された質問紙調査の質問項目については次稿にて扱う。また、質問紙調査を含む調査全体の概要については、昨年度抽稿（名古屋文理大学紀要 第13号 掲載）に記した通りである。なお、当該調査の原データは筆者の本学研究室にて保管している。

運動成員像を明らかにする上で、第一に手掛かりとなるのは、当時の運動成員自らによる自己定義である。「池子米軍住宅に反対して自然と子供を守る会」（以降「守る会」）パンフレットには、以下のように記されている。逗子市は「東京から50km、電車でも車でも1時間、湘南の一角にありとろりと長閑な住宅専用の町、…（筆者略）自主財源率全国第3位、保守的でおとなしい性格の町¹⁾。ここに描かれた、昼間人口が少なく²⁾、東京に通勤する比較的裕福なサラリーマン家庭が多く居住する街というイメージは、逗子市の一般的なイメージと相違ないものであろう。

同会が編集した資料によると、米軍住宅建設への賛成・反対を問わず、市民全体の政治的態度は「日頃支持政党をもたない」=43%、「自民党支持」=34%である³⁾。これに対し、筆者の実施した質問紙調査結果⁴⁾によれば「池子の森を守る運動」成員の支持政党は、「社会党支持」=39%、「自民党支持」=2.7%であり、市民全体の傾向とは異なっている。この点については本稿4で詳しく見る。

続いて質問紙調査結果から運動成員の基本属性を見ていくと、年齢層では、運動発生の1982年時点におい

て30代後半～40代が6割以上、女性が約85%を占める。また職業については、専業主婦46%、無職10%、パートタイム9%である。最終学歴は、旧制の高校・高専・女学校・大学・大学院と、新制の短大・高専・大学・大学院のそれぞれ卒業・修了を併せて50%超であり、年代を考えると高学歴者の多さが顕著である。

以上に見られる通り、政党支持には革新政党支持という典型的な社会運動成員像が見られるものの、その他の点では従来型の社会運動、すなわち労働運動から想起されるそれとは異なる属性をもった人びとの像が浮かび上がってくる。また本稿4では、実は革新政党に対しても当運動が距離を置いておいたことが見出され、従来の運動が革新政党と共闘したことは対照的である。

2 リーダー層とリーダーシップのあり方

この項では運動のリーダー層とリーダーシップのあり方に焦点を当て検討する。

「守る会」は、前稿で見た通り1982年11月に池子弾薬庫において建設のためのボーリング調査が行われた際、池子の森のゲート前に自発的に集まった市民が結成した会である。同会の成員が執筆した『市民協奏曲 逗子市長選への軌跡⁵⁾』によると、同会のルールは以下の通りであった。

- ①池子米軍住宅建設に反対するための会である。（目的）
- ②指導者は置かない。全て週一回の会合で決め、計画は言い出した人が責任をもってやり遂げる。平凡な市民としての発想を大切にしておく。（方法）
- ③政治的立場をとらない。人種差別をしない。敵を作らない。（立場）

同書によると、この会には体系だった組織はなく、会長も置かないが、「いわば電話連絡網の中心として」代表世話役として杉浦直子氏が選ばれた。筆者が実施した同会会員に対する聞き取り調査によると、会がこうした形をとったのは「組織は1つの意思で決まり、上下下達で動くものだが、そういうものに縛られたくないから」、「組織に縛られない集まり」、「組織でない組織」でいようとしているとのことだった。会のルールからも、聞き取り調査に対する回答の言葉からも、会員ら自身が新しい社会運動の姿を自覚的に模索していることが垣間見られる。

同会は先に述べた通りボーリング調査の開始がきっかけとなり自然発生的に出来上がったものではあった

が、後に市長となる富野氏はゲート前で連日人々が集まる中で、ピラ配布の活動を行っていた。ゲート前に集まって三日目のピラでは⁶⁾、当時周辺住民から寄せられていた「集まっているのは“アカ”(=左翼)である」という噂に抗すべく、言論や行動の自由を訴えている。政治的に保守的な同地域において“アカ”であるとレッテルを張ることは中傷以外の何物でもなかったからである⁷⁾。更に1週間目のピラでは、「地区住民の結束により、市、県、国、アメリカを動かしてゆく長い運動が必要である事。…(筆者略)協力者を求め自然保護団体、マスコミに訴え、アメリカあての手紙や署名を企画し、市長や議長を訪米、アメリカの法律で中止へ、国の予算を止める働きかけ、全市的理解を得る等、様々な方法が考えられる事。」と記されている。ここから明らかなように、富野氏はバラバラに集まっていた市民らをまとめ、「反対運動の骨格」⁸⁾を提案する役割を果たした。その後「守る会」が結成され、このピラに書かれていた提案は初期の活動として実行されてゆくことになる。

前稿で見た概要の通り、この運動においては各局面で運動の中心となる人物や組織が変化していった。また、運動の全体は複数の団体から成っており、一枚岩ではなかった。しかも「守る会」には先述の通り「会長」等の役職が置かれていない。従って誰から見ても明白な代表者や指導者を名指すことはできない。そこで本稿では、それぞれの時期に運動の活動における指針を提案し、実質的に運動を牽引する役割を果たしたと見られる人物を、その時期における運動の「リーダー」と呼ぶこととする。この定義によって、同時期に複数のリーダーが存在することや、ある時期にリーダーであった人物がその後リーダーでなくなることも許容されることになる。この定義に依るなら、運動前半(昨年度拙稿の区分に従えば、発生期から発展期・分裂期まで)のリーダーは役職等に関わらず当初から富野揮一郎氏であったといえる。

3 運動の組織と“運動成員”

この項では運動の組織のあり方の観点から検討する。

「池子の森を守る運動」の特徴の一つは、「守る会」とは別に、政治活動を行う別団体として「緑と子供を守る市民の会」(以下「市民の会」)が結成され、両会が運動の両輪として機能した点にある。「市民の会」は、米軍住宅建設容認に転じた三島虎好市長に対するリ

コール運動の後、出直し選挙戦に対応する必要から結成された⁹⁾。「守る会」のルールには「政治に関わらない」との項目があったためである。「市民の会」の性質は「守る会」とはかなり異なり、会長に田口武一氏、副会長に「守る会」の杉浦直子氏、相談役に評論家の古谷綱正氏、選対本部局長に富野暉一郎氏、次長・事務局長に大和氏と、役職名も決まっており、また役職者は杉浦氏を除くと男性で占められていた¹⁰⁾。最初の選挙において、市民の会から富野氏が市長として当選し、また市議三名が当選した。

「守る会」と「市民の会」との関係性をそれぞれに所属する会員の面から更に詳細に見るなら以下の通りである。質問紙調査結果によると、「どちらの会に入っているか(いた)か」について、「守る会」のみとの回答が33%、「市民の会」のみとの回答が21%、「両方」との回答が27%、「どちらにも入っていない」との回答が19%である。前稿の通り、この質問紙調査の対象者は、署名運動等の活動に参加した逗子市在住(当時)の人々であり、実質的に運動成員全体であるとして沢光代前市長から紹介された。にも拘らず、「守る会」「市民の会」のどちらにも所属していないとの回答が20%近くある理由について沢氏に尋ねたところ、「会に入っているか否かは、会費を払っているか否かで決まる。定期的に納入しない人もおり、会員/非会員の境界は不鮮明」とのことだった。また、会費を納入しなくても、カンパや活動上の諸経費を持ち出して賄うメンバーもいたとのことである。

ここで、この運動と「運動成員」と、「守る会」会員であること、および、「市民の会」の会員であることとの関係について確認が必要であろう。この三つの集合が一致しないことは、ここまでの検討から明らかである。本稿の目的は実質的にこの運動に参加していた人々の姿を描き出す点にあるので、定期的な会費納入の有無によって定義される「会員」であるなしに拘らず、むしろ多様な参加をした人々を「運動成員」と看做すことが有意義である。ただしその場合、「運動成員」の境界線は曖昧にならざるを得ない。この質問紙調査では、運動後半のリーダーとなる沢光代氏によって署名活動への参加等の活動記録に基づき「実質的な運動成員」として紹介された300名が調査対象となったが、一定の恣意性が紛れ込んでいる可能性は否定できない。

これらの運動成員にとって、「守る会」と「市民の会」の二つの会はどのような存在だったのだろうか。この両

者の活動の中で対立や矛盾を感じることはなかったのだろうか。引き続き質問紙調査結果を見ていくこととする。

「どちらの会で主に活動する(した)か」の問いに対しての回答を見ると、「守る会」39%、「市民の会」25%であり、各々の会に「入っている」と回答した各々33%、21%を上回る。また、「どちらの会で活動する(した)か」の問いに「両方」と回答したのは18%で、両方の会に入っていると回答した27%に比較してかなり少ない。このことは、「市民の会」は「守る会」より後に派生してできた団体だが、二つの団体の目的が異なっているために、両方の会に所属してはいるものの、実際に活動する際にはいずれかを選択する会員がいたことを示唆していると考えられる。すなわち、運動会員から見た時、二つの会は異なる性質・趣旨をもつ団体として区別されていたことが想像される。

4 運動の目的

ここでは「守る会」「市民の会」各々の会報・ピラに見られる文言と質問紙調査結果とから、この運動の「目的」について検討する。

「守る会」の目的は先述の通り、米軍住宅建設に反対することであり、その他は挙げられていない。特徴的なのは、この会ではなぜ反対なのかという理由は一切問わないということが、強調されている点である。「池子米軍住宅に反対であるならば…(筆者中略)、安保に賛成だろうと、どの政党を支持しようかと、何に興味があろうと構」わない¹¹⁾。

このことは運動過程で配布された外部向けピラからも読み取れる。例えば1988年に「守る会」が配布したピラには、何人かの運動会員から返子市民へ訴えかける文章として「返子の自治と池子の緑を守りたい」、「埋蔵文化財を守るべきである」、「基地の町を選びますか」、「軍備で国が守れるのでしょうか」、等々の文章が掲載されている。一見して反対の理由がまちまちであることがわかる¹²⁾。

ただし、「守る会」と「市民の会」とは通常個別にピラを発行しており、各々のピラの内容には異なる傾向がみられる。「守る会」のピラは先述の通り多様な反対理由が掲載されていることが特徴である。それに対して「市民の会」のピラでは、冒頭に「市民自治はあなたも参加するまちづくりです」とのキャッチフレーズが毎号掲げられ、文中に「市民自治」「地方自治」「民主主義」等の表現が多い。こうしたピラにお

いて選択される文言の相違は、「守る会」の自発的で自由な集まりであるという性質と、「市民の会」の政治団体としての性質との相違を表現するものと理解できる。

1988年市長選挙直前の「市民の会」ピラでは、「再開発とリゾート整備による活性化」、「都市施設整備で安全・快適な町へ」との文言が盛り込まれており、「守る会」の「池子の森を何にも利用せずただそのまま残したい」とする「反開発」の旗印とは矛盾すると思われる文言も見られる¹³⁾。これらのずれについて、いずれかが本音であったりタテマエであったりするものと解釈するより、そのまま運動会員間の価値観の相違の幅として理解した方が無理ないように思われる。

「守る会」の会報・ピラには時期によっても異なる複数の反対理由が現れるが、主なものは「生態系」や「貴重な動植物」、「都市の希少な緑の保護」等の「自然保護」に関するもの、「基地の町」になることへの不安など「生活環境の保護」に関するもの、米軍住宅建設計画が市民の同意なく決定されたことに反発する「住民自治」に関するもの、安保体制や軍備拡張への反対等「反戦・平和」に関するものに大別される。

質問紙調査結果から見ると、「米軍住宅建設計画」には、どの観点から反対か」の問い(複数回答可)に対し、「自然環境の保護」は94%と大多数の運動会員が挙げている他、「生活環境の保護」・「住民自治」・「反戦・平和」が各々60%弱で拮抗している。つまり、この運動の会員が運動参加に際して基づいていた価値観のうち、最も広く共有されていたのは「自然環境の保護」である。この運動に対して、住民自治の運動、反米軍基地運動と呼称することも可能だが、大多数の運動会員に共有されている価値観の観点から見ると、「自然保護運動」と呼称することがより妥当であると思われる。

5 政治的態度と既成政党との関係

ここでは、運動会員に対する聞き取り調査結果と質問紙調査結果に沿い、この運動が既成政党との関係においてどのような立場をとっていたかを検討する。

池子の森を守る運動の際立った特徴は、既成政党と関わらないことを当初から宣言していた点にみることができる。その理由は「多くの住民運動が政党に取り込まれ壊されていった過去の例¹⁴⁾」にある。聞き取り調査においても、「従来の運動は国や共産党に乗っ取られることが多かったが、そうなりたくない」との回

答があった。社会党（当時）との関係について尋ねると、「社会党は（神奈川県では）中央一國一市の間でねじれを起こしている。」「党内は『おじさん』ばかりで、土井さん（聞き取り調査時点での党首）のサポートがない。組合は自分たちのことばかり考えていて身内争いになっている。現市長を倒すという点で一致しているのに、緑を守ろうとする市民の声と、党の理屈で動く労働組合とが噛み合わない。」との回答があった。また、「以前に組合員に、『あなたたちは幻想をもっているのかもしれないけど、議会や世の中は変わらないんだよ』と言われ幻滅した。」との回答もあった。

共産党や社会党、労働組合に対するこれらの批判的な発言を注意深く見てみると、いずれの発言も党の現状、特に党という組織体に根差す問題の指摘であり、政策や思想そのものに対する言及ではないことがわかる。それは、運動成員の中に「組織」というものに対する距離感、違和感のあることを示唆しているようにも思われ、このことは「守る会」が「組織でない組織」を目指すとしていることとも呼応している。そのことが持つ意味については、次稿で検討する。

以上で見た通り革新政党に対する不信感が、「県議会で社会党候補を推すことはしない」としたことや、1984年の市長選挙前、当運動を支持する内容のピラを出した共産党に対して、「共産党さん迷惑です。はじめ反対、今になって賛成 どうして？ エゴ丸出し」という不快感を表明するピラを出したことの背景にあったと解釈できる。

運動成員ら自身の政治的な立場に関しては、「自分たちはイデオロギーを持っておらず、むしろイデオロギー的に見ている人たちを市民カラーに染めていっているつもり」「政治的には、政党やイデオロギーでなく、政策を見る」との回答だった。ここでは“イデオロギー”は“党利と結びついた固定的意見”といったような意味合いであろう。そうしたものと“市民カラー”とは対極にあると運動成員らは考えていることがわかる。

このように当運動の成員らは、運動がいずれの政党とも関係がないことを強調し、実際にこの運動が政党と表だって共闘したことはない。ただし、聞き取り調査の中で、「表面には出ていないが、署名活動の際には共産党、社会党両党の協力があった」との回答があった。これについてこの回答をした運動成員は「共闘ではなく、『利用されずに利用する』という運動の姿勢の一例」と述べている。

革新政党に対する不信感はあるものの、運動成員の支持政党を質問紙調査結果から見てみると、一番多いのは「社会党支持」＝39%であり、続いて「支持政党なし」＝31%、「共産党支持」＝17%、「その他政党支持」＝3%、「自民党支持」＝2.7%であり、革新政党支持率が圧倒的に高い。本稿1で見たように、同時期の逗子市民全体の政党支持は「日頃支持政党をもたない」＝43%、「自民党支持」＝34%であるから、当運動成員が当該地域において特徴的な政治的態度を示していることは明らかである。革新政党に対する不信感と支持という一見わかりにくい態度について、聞き取り調査では「現状の自民党への批判という意味で、今のところ社会党にもう少し強くなってもらわないと仕方がない」と回答し、積極的な社会党支持でないことが察せられる。しかし他方で、「最初のころに比べて（革新政党に対する）アレルギーがなくなってきて、今では『革新』と言われることにはあまり抵抗はない」との回答もあり、運動過程において成員の政治的態度の変化してきたことが窺われる。同様に安保問題についても、当初は「守る会」パンフレットにおいて「反米ではない」ことが強調され、「安保については論議しない」ことになっていたが、「運動に関わるうち、安保の不平等性については考えるようになった」との回答があった。

以上をまとめると、当運動の成員の政治的態度は、現状（当時）の革新政党に対しては批判的だが、保守政党を支持しているわけでもなく、むしろ政治団体すべての状態に対して批判的であると解釈できる。政党との共闘を避けていることについては、同地域が「アカ攻撃をやりたが」る傾向が強い¹⁵⁾ことから、戦略的に採られた方策としての側面もあると考えられる。従って、運動成員の政治的な性向を「革新」と呼ぶことはできるが、しかしそれは既存の革新政党とは異なる別種の革新的な政治への希求として理解されるべきであろう。

関連することとして、当運動は生協活動とは近い関係にある。「生活クラブ生協」および「生き生き会議 逗子ネット」¹⁶⁾は当運動を支持しており、これら団体の活動を通して当運動に参加している成員もいる。ただし、これら団体との関係も、既存政党との関係同様、公式のものではない。その他、「生活改善」や「反原発運動」に個人的にかかわっている運動成員もいるが、会として特定団体とのつながりはないとの回答が、聞き取り調査では得られた。

6 運動戦略上の特徴

当運動の戦略上の特徴として第一に挙げられるのは、ここまでの分析でも言及してきた多くのビラの配布である。ビラ配布は、運動発生の端緒となったゲート前で富野氏が配布したのが始まりと見られ、内容的には、“アカ攻撃”に対する反論、建設に反対する多様な理由の説明、選挙時には相手候補に対する批判等が見られる。これに対し建設受け入れ派や、各政党、「守る会」「市民の会」以外の団体によるビラも多数配布され「ビラ合戦」と呼ばれる様相を呈した。

「守る会」のビラの特徴としては、文章による表現に加え「フクロウのアイドルマーク」と呼ばれるものが毎号登場することを指摘できる。この可愛らしいデザインは、逗子市在住の玩具メーカー勤務であるプロのデザイナーによって制作されたものであり、この運動が「なぜ逗子に米軍住宅？」という「子供のように素朴な疑問」から出発していることを示しているという¹⁷⁾。2010年代の今日であればキャラクター、あるいはキャラと呼ばれるであろうこうしたデザインの運動団体による使用は当時としては画期的であり、運動成員ら自身による従来の運動との差別化がそこに表れていると解釈できる。

戦略上の特徴の第二は、市外や国外に運動への賛同を求めた点にある。この戦略は、先述の通り富野氏がゲート前で配布したビラに既に記されていた。実際に1983年に「守る会」会員が建設反対の署名を携え米国務長に手渡すべく渡米し、これが契機となってアメリカの複数の自然保護団体の協力を得るようになり¹⁸⁾、国際シンポジウムの開催、後のアセス意見書にアメリカをはじめとした海外からも募る等の活動が行われている。また、日本国内においても全国的な世論の喚起を狙い、全国各地の自然保護団体を招いて「池子の森を守る全国大会」を開催したことを始め多くのイベントが行われた。こうしたこともまた、当時の運動団体としては画期的なことだった。

戦略上の特徴の第三は、マスコミの積極的な利用にある。聞き取り調査への回答では「マスコミは良く利用する。イベントの時に呼ぶ。神奈川新聞で紙上討論会をしたこともある」とある。他方で当運動は雑誌『諸君』において「住民エゴ」と批判的に取り上げられたり、週刊誌において会員間の個人的な人間関係についてスクランダラスに取り上げられたりもした。雑誌等による批判的な取り上げられ方について尋ねた聞き取り調査への回答によれば、「雑誌等による批判・中傷に対

する反駁は最初の頃はしたが、今は相手にするのも潔くないのではない。」。こうして運動が意図的に行ったマスコミの利用と、運動による意図とは別の取り上げられ方の双方が相まって、当運動は日本国内で高い知名度を得ることとなった。

第四の特徴として、シンクタンクの設立を指摘することができる。前稿で記した通り「守る会」のシンクタンク IGOC (Ikego Green Operation Center) は富野氏の発案でつくられたが、「守る会」会員による説明によれば、「学者グループを利用する。なぜ池子の森が大事か、反対運動が必要かの説得のため権威付けが必要。関係のないところやわからないところは切り捨てる。」とのことである。この「利用する」という文言は既存政党との関係においても別の運動成員によって使用されており、当時の運動内部において外部団体との関係に関連して多用された表現であると推察される。

以上指摘した特徴は、筆者によって偶然観察されたものではなく、実は運動成員ら自身によって常に自覚されているところのものである。運動の実質的リーダーであった富野氏によって運動の方針が決定づけられたことはこれまでに見た通りである。同氏は最初の市長選挙前に「全く違った選挙をすればいいんですよ。イメージ選挙ね。PRをたっぷりして、新しい市民意識に訴えれば、勝てると思いますよ」と述べた¹⁹⁾。上述の①ビラの多用とアイドルマーク、②アメリカはじめ海外へのアピールと国内各地の自然保護団体を招いてのイベント、④マスコミへの働きかけ、⑤研究者による権威付け、という戦略上の特徴はすべて、富野氏の「新しい市民意識に訴えれば勝てる」との認識と結び付けて理解することができる。すなわち、既存の政党と無縁であり、国際的、マスコミに対して開放的で、研究者を味方につけた、といった“スマート”なイメージを作り上げ訴えかけることが、選挙戦のみならず運動そのものの戦略の柱としてあったと考えられる。

上述のスマートなイメージへの自負は、聞き取り調査への回答の中で、最初の対立相手であった三島逗子市長や、建設受け入れ派団体、更には労働組合への言及が為される際最も鮮明に表れる。筆者は当時、複数の運動成員から別々の時に「シマシマの背広を着たようなおじさん」との表現を聞いた²⁰⁾。これは先述の敵対者らを表現する揶揄である。敵対者への揶揄が政治的な場面で使用されることは珍しくないが、ここでは“スマート”な自己イメージへの強いこだわりとの対

比において使われていることが特徴的である。なぜこうした自己イメージが当運動においてそれほど重要なのかについては、次稿以降で詳しく検討する。

7 運動への参加動機

質問紙調査において運動への参加時期を訪ねる項目への回答では、1982年10月（ゲート前）＝23%が最多であり、この年の11月に「守る会」が結成されて年内までに参加したとの回答は全体の38%を占める。この後、1983年末までに64%が参加、その後は年を追うごとに新規の参加者は減少し、1988年後期以降の新規参加者は皆無となる。

参加した直接の契機を訪ねる問いへの回答では、「自ら積極的に参加した」＝37%が最多で、続いて「誘われたから」＝27%となっている。「ピラなどを見て」は13%に過ぎない。多くの運動成員がボーリング調査の実施直後かあまり時を経ずに運動への参加を開始していることから、また「自ら積極的に参加した」との回答が多いことから、市民による反対運動は建設主体による現地でのボーリング調査の実施を契機として始まったとする前稿の解釈が裏付けられる。

建設計画が公になったのはボーリング調査以前の1980年の防衛庁による計画の示唆、あるいは、翌1981年の政府による計画の了承時点であるが、この時点で反対運動は発生していない。前稿で見た通り、この時点では逗子市によって接收地返還運動・建設反対運動が行われていたため、逗子市民は建設計画を知っているものの、反対意見の表明を市に任せていたと考えられる。

ボーリング調査の実施が反対運動発生の一契機となった理由については、前稿で検討した聞き取り調査への回答に見られる通り「市には任せておけない」との当事者意識の高まりや、建設計画が目前に迫ったという危機意識を挙げることができる。しかし更に考えてみると、日米安全保障条約という国策の根幹にかかわる建設計画であることは市民によって当初から認識されていたのであり、ボーリング調査前の数年間は市による反対運動が行われていることも広く知られていたのだから、いよいよボーリング調査が開始された時に、市民が反対意見の表出を諦めてしまう可能性もあったはずである。なぜボーリング調査は市民による反対運動発生の一契機となり得たのか。ここでは、ボーリング調査が、反対意見を持っている人びとが直接出会う機会を提供した点が重要であるとのみ指摘しておきた

い。この問題については、先に指摘した運動成員の自己イメージへのこだわりの問題と併せ次稿以降で詳しく検討する。

なお、聞き取り調査への回答において、「最初に建設計画を聞いた時どう思ったか」という問いに対して、89%が「大変なことになると思った」と回答し、「実際に建設されたら本人や家族が被害はどの程度になると予想しているか」との問いには、「かなり大きいだろう」「非常に大きいだろう」との回答が併せて79%となっている。ただし、反対理由が多様であるため、「被害」の内容も一様でないことが推察される。「池子の森」は前稿で確認した通り市民が入ることのできないフェンスで囲まれた地域であり、建設によって生じる被害とは、建設により森が破壊されることその他は、建設作業により建設作業用車両が周辺に入ってくることや、米軍兵が市内に住むようになること等、異なっている。米軍兵に関連しては「人種差別は良くない」との意見が早くから運動成員間に見られ「守る会」のルールにも掲げられている。つまり、この運動においては、運動成員が全員で共有する明確な利害関係が主観的にも客観的にも存在しなかったと見られる。当運動が二人の市長を誕生させ10年近く継続した理由についても、次稿以降で検討が必要である。

8 まとめ

本稿では「池子の森を守る運動」について、質問紙調査結果・聞き取り調査結果・ピラ等の資料・文献等から①運動成員の基本属性、②リーダーとリーダーシップ、③組織、④運動の目的、⑤政治的態度と既存政党との関係、⑥運動戦略上の特徴、⑦参加動機、について検討した。その結果、①高学歴である30～40代の専業主婦が運動成員に占める割合の高いこと、②「守る会」では会長などの役職を置かず、富野輝一郎氏は運動発生に先立ち運動方針のアイデアやピラ配布という方法を提案する等、実質的なリーダーとしてリーダーシップをとっていたこと、③「守る会」「市民の会」の二団体が役割を分担し、運動成員間にも二団体への棲み分けがあったこと。また「守る会」では上位下達や拘束等の組織らしさを避け、個人による活動の重視が目指されていたこと、④運動の目的は「自然保護」を大多数の人が支持する他は、「生活環境の保護」「住民自治」「反戦・平和」を挙げる成員が60%弱ずつであること、⑤運動成員の支持政党は革新政党が多数を占め、続いて無党派であるが、運動の活動上は革新政

党に対しても距離を置き、時にあからさまに批判的であったこと、⑥運動上の戦略としては富野氏の言う「イメージ戦略」を重視したこと、⑦参加動機としてはポーリング調査が直接の契機として挙げられるものの、運動成員が共有する利害関係が明確でないこと、が明らかになった。

次稿では先行研究による指摘を検討した後、理論的な見地から、前稿・本稿で明らかになった当運動の特徴の分析に入ることとする。

注

- 1) 池子米軍住宅建設に反対して自然と子供を守る会・緑と子供を守る市民の会、『逗子の市民運動』, p.1
- 2) 渡辺登,『生活自治型住民運動の展開—池子米軍住宅建設反対運動を事例として』, p.252
- 3) 自民党支持率34%
- 4) 質問紙調査の詳細は昨年度拙稿.
- 5) 緑と子供を守る市民の会,『市民協奏曲 逗子市長選への軌跡』, p.29-30
- 6) 同上, p26-28
- 7) 同上, P.27
- 8) 同上, P.28
- 9) 前掲,『逗子の住民運動』, p.4
- 10) これらの人々を含め多くの人が両会の運営上重要な役割を果たした。次稿以降で扱う運動の後半期においては沢光代氏にリーダーとして着目する。
- 11) 前掲,『逗子の住民運動』, p.4
- 12) 「守る会」1988年ビラ,「池子の森を守る気持ちは変わりません。その1」
- 13) 「守る会」1988年ビラ, 市長選挙直前
- 14) 前掲,『市民協奏曲 逗子市長選への軌跡』, p.140
- 15) 同上, p.27
- 16) 逗子市内の生協で社会党と関連が深い。
- 17) 前掲,『市民協奏曲 逗子市長選への軌跡』, p.30
- 18) 前掲,『市民協奏曲 逗子市長選への軌跡』, p.157
- 19) 前掲,『市民協奏曲 逗子市長選への軌跡』, p.159
- 20) 前掲,『市民協奏曲 逗子市長選への軌跡』, p.127